

第37号

2017年12月

西南学院 宗教局報

発行所 西南学院宗教局
編集者 宗教局長 松見 俊
〒814-8511
福岡市早良区西新6-2-92
TEL (092) 823-3336
FAX (092) 823-3335
E-mail: rel@seinan-gu.ac.jp
印刷 SRプリンティングセンター



「民全体に与えられる大きな喜び」

宗教局長 松見 俊

神のみ子イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスが今年も近づいてきました。クリスマスはすっかり日本社会に定着したと言ってよいでしょう。最近では、ハロウィーンまで流行するようになりました。「何でも来い」の商業主義に問題を感じないわけではありませんが、硬いことは言いません。ハロウィーンは10月31日です。スイス留学時代、子どもたちは秋の収穫期に、農家から大きな蕪（カブ）をもらい、それをくり抜いて、その中にロウソクを立てて街を歩きました。元は古代ケルト人のお祭りであったようです。森などに棲む魑魅魍魎（ちみもうりょう）、つまり、妖怪のような化けものたちから護られるように大騒ぎをするのでしょうか。キリスト教会がこれを取り入れて、信仰を持って亡くなった聖徒たち（all hallows）を思い起こす行事となりました。キリスト教会では「万聖節」（all Saints' day）と言います。すでに召された人たちを「思い起こすこと」は大切なことです。

さて、クリスマスが12月25日に祝われた最初の記録は、336年のローマの祝祭を扱った文献に登場しますが、当時の異教の「太陽誕生」の祭りに対抗して「義の太陽」であるキリストが祝われるようになったとされています。確かに今年の冬至は12月22日であり、冬の真ただ中から日が長くなり始め、義の太陽が勝利するのです。

昨今の世界はテロ、北朝鮮と米国の対峙など暴力による均衡の持つ恐怖感や経済的貧富の格差が広がり、個々人もどこか傷つきながら生きています。明日が見えない世界です。しかし、聖書は、必ず、朝が明け染めることを約束しています。絶望することは人間には自然のことですが、希望し、喜ぶことは意志の問題であると言った哲学者がいました。ルカによる福音書2章10節では、イエス様の誕生の際、天使が「恐れるな、わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる」と語ったと言われます。「民全体に与えられる大きな喜び」！ 素敵な響きです。藤木正三の『断想 神の風景』の中から「喜び」と題したエッセイを引用します。題は「喜び」です。「どれほど深い信仰でも、そこに喜びがなければおかしいと考えるべきでしょう。どれほど熱心な奉仕でも、そこに喜びがなければおかしいと考えるべきでしょう。どれほど正しい生活でも、そこに喜びがなければやはりおかしいと考えるべきでしょう。喜びとは、ことの真偽を判別する大切な基準です。喜びのない深さは自己満足している深刻さなのです。喜びのない熱心さは報いを求める不平なのです。喜びのない正しさも他を裁く誇りに過ぎないのです。いずれにせよ喜びのないものは、すべて未熟であると考えて間違いありません。」

宗教局 クリスマス行事

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 12月6日(水) 中学校・高等学校・母の会クリスマス礼拝 | 12月19日(火)～21日(木) 高等学校クリスマス礼拝 |
| 12月7日(木)・9日(土) 幼稚園クリスマス祝会 | 12月21日(木) 大学キャンドルサービス |
| 12月9日(土) 保育園こひつじクリスマス | 12月21日(木) 小学校クリスマスチャペル |
| 12月13日(水) 教職員クリスマス | 12月22日(金) 西南学院コミュニティークリスマス |
| 12月16日(土) 保育園さみどりクリスマス | 12月25日(月) (キリスト降誕祭) |
| 12月19日(火) 中学校クリスマス礼拝 | |

※宗教や心の悩みについて、ご相談のある方はお気軽にどうぞ。

メール lhankins@seinan-gu.ac.jp
Tel: 092-823-3381 (宗教主事室)

平和の君

宗教主事 リディア・ハンキンス



今年の秋、5,000名の女性が2週間にわたりイスラエルとパレスチナを巡り歩き、平和を訴えました。女性たちはユダヤ系を中心に、パレスチナや様々な立場から集い、次の戦争を起こさないで、共に平和に生きることができるよう、取り決めることを勧めました。それは、一つの方向性を指定せずに、とにかく話し合い、理解し合って、皆が納得できる道に進むように、ということです。「平和の実現が不可能だと思ふことは、神を信じないことと同様だ」とその代表者は言いました。私たちがまずすべきことは、平和を願い、平和の可能性を信じ、平和の道を求めることではないでしょうか。キリスト教教育によって、平和への希望を捨てない若い人を増やしたいと思います。今年のクリスマスに、この混沌とした社会に神様が絶えず来てくださることを見落とさないように、新たに、驚きと希望、また感謝をもって平和の君をお迎えたいと思います。

賛美歌創始者としてのルター

音楽主事 安積 道也

今年は、宗教改革500周年記念の年でした。宗教改革者として知られるルターですが、礼拝で歌う「賛美歌」の創始者であり、それを会衆賛美として礼拝に導入した人としても有名です。

ルターは礼拝改革を始めた際に、同胞の牧師たちに向けて手紙を書きました。そこで彼は、「会衆賛美歌」のアイデアを披露し、実例として自作の賛美歌（新生讃美歌474番）を一曲附し、賛美歌作成を要請したのです。しかし当時、ルターのように詩と音楽の才を合わせ持つ神学者は他にいず、結局、賛美歌の詩作と旋律作曲はルター以降すぐに分業制となりました。

ルターの賛美歌詞は、聖書の解釈に深く立ち入り、よく練られた説教のように展開します。民衆が、賛美歌を歌いながら、生涯かけて聖書の言葉を理解していくことをルターは期待していたのです。

ちなみに新生讃美歌に採用されたクリスマス期のルターの賛美歌には182番「天より降りて」があります。これは民謡の替え歌であり、ルターが自分の子どもたち用に作ったもの、すなわち歴史上初の「こどもさんびか」でした。

サンタクロースのいるクリスマス

大学宗教部長 今井 尚生

商業主義的色合いを強める日本のお祭り。クリスマスも例外ではありません。サンタクロースもすっかりその役割を担わされるようになりました。しかしそのようなサンタクロースであっても、「サンタクロースはいるの?」という子どもの発する真剣な問いにどのように向き合うか、100年以上前にアメリカの新聞に載った社説を本にした『サンタクロースっているんでしょうか?』（中村妙子訳 偕成社1977年）は、子どもに向き合う姿勢の大切さを私たちに教えてくれます。

児童文学者の松岡享子は言います。「目に見えないものを信じるという心の働きが、人間の精神生活のあらゆる面で、どんなに重要かはいうまでもない。のちに、いちばん崇高なものを宿すかもしれぬ心の場所が、実は幼い日にサンタクロースを住まわせることによってつくられるのだ」（松岡享子『サンタクロースの部屋——子どもと本をめぐる——』こぐま社1978年）。大学生ともなれば、サンタクロースの存在は既に過去のものになっているかもしれません。しかしその大学生がいつか親になったとき、信じることの大切さを子どもたちに伝えることのできる人に成長してほしい、そう願いつつ今年もクリスマスを迎えます。

忖度、排除、分離壁…

高等学校宗教主任 坂東 資朗

内外の政治家たちの言動に社会の暗さの深まりを幾度も思わされた今年、中高では宗教改革500周年を記念して、代表的な提唱者マルティン・ルターの生涯と改革の広がりを伝えるポスター展を行いました。腐敗した権力と化した教会指導者の意向を忖度するのではなく、排除（破門）されつつもドイツ語訳聖書を完成し、一部の人に独占されていた聖書・讃美歌を自分の言葉で読み、歌うことができる道を開いたルター。今日の教会、西南のキリスト教教育は改革者たちの働きに深く支えられています。時を同じくして開催した後期ミッションウィークでは奥田知志先生（バプ連東八幡教会牧師）から、生産性の有無・高低を判断基準とし、生きる意味ある命／そうでない命の分断が進行している社会で自分・他者のいのちとどのように向き合っていくのか?大きな問いを受けました。学院で聖書を開く一人ひとりにとって、このクリスマスが、一人として排除や分離の悲しみの道を歩かないようにと人の姿となられてこの世に

来て下さった神の愛・願いを正しく付度し、わが
思い・言動をどう改革するか思いめぐらす有意義
な時となりますように。



クリスマスに思う ～主役はだれ？～

中学校宗教主任 三上 梓

中学校では12月19日(火)の1・2限目の時
間でクリスマス礼拝を持ちます。中学校では伝統
的に「二部形式」で礼拝プログラム(第一部でゲ
ストの先生からの講話を含めた従来の礼拝を、第
二部として音楽系部活動の生徒たちによる演奏と
献金の時間)を持ってきました。今年度は、全体
を厳かな礼拝の形式にまとめて、プログラム内容
を大幅に見直しました。

対外試合や大会がない音楽系クラブの部員たち
にとって、全校生徒の前で発表するクリスマス礼
拝の機会は、日頃の練習の成果を発揮する良い時
でもあります。先輩たちを見て、「自分たちも！」
と思っていた生徒たちからは、「なんで変えるの
ですか?」「せっかく自分たちが主役になれる場
所なのに」との反応がありました。

ふと思うのです。クリスマスって、いったい誰
が主役となる日なのだろう?御子イエス・キリス
トの誕生を、信じる者もそうでない者も共に集っ
て、お祝いしていく。待ち望んでいく。生徒たち
が主役になるのが学校という場ではありますが、
その中で祝うクリスマスの真の主役について思い
を馳せつつ、生徒たちと共にクリスマスの時期を
過ごしていきたいと思います。

Dona nobis pacem

小学校宗教主任 黒木 佐幸

♪Dona nobis pacem, pacem, Dona nobis
pacem・・・

チャペルに子どもたちの優しい歌声が重なり合
う。

Dona nobis pacem(神よ、たまえ平和を)と
いう短いことばを、穏やかで優しいメロディに乗
せて輪唱するだけなのであるが、その讃美の輪の
中にいると、いつまでもこの輪の中に留まってい
たいという思いに駆られる。それと同時に、雪が
空から音もなくあとからあとからゆっくりと舞降
りてくる様子を思い浮かべている。そして優しく
降り積もる雪は、いつしか街中を真っ白に覆い、
美しく輝かせるのである。

ここしばらく、早朝この讃美が私の頭の中に繰
り返し聞こえてきて目が覚め、知らない間に口ず
さみながら出勤の準備をしている。

日々報道されるニュースは、人々の不安を煽る
かのように目や耳を覆いたくなるものばかりなの
だが、私はこの讃美を口ずさみながら、幸いなこと
にいつも平安が与えられていることに気づかされた。

声を張り上げ、拳を振り挙げて闘う闘い方もあ
るだろう。しかし、わずかなことばであっても、
どんなに小さな弱い声であっても、願いと祈りを
込め、希望を持って繰り返し繰り返し讃美する
という闘い方もあるのではないかと思えてきた。神
がのぞむ闘い方は、人間が考えるような闘い方
ではないのではないだろうか。

クリスマスが近づいてきた。毎年、イルミネー
ションが点灯した師走の街が慌ただしく賑やかに
なればなるほど、私は街の喧騒から離れたくなる。
そして、イエス様が誕生された聖なる夜の静けさ
に思いを馳せる。

♪Dona nobis pacem, pacem, Dona nobis
pacem・・・

人々の歌声が二重三重と重なり繋がっていくよ
うに、歌に込められた願いと祈りもまた重なり、
広がり繋がり、やがて世界を変えることになるの

だ。そう信じて今年のクリスマスも平和の主イエス様のお誕生をお祝いしよう。

クリスマスの取り組みを通して感じた神様の愛

舞鶴幼稚園宗教委員 島中 妙子

舞鶴幼稚園では、11月中旬からクリスマスを迎える準備をしていきます。年長児は様々な人にクリスマスの本当の意味を伝える為、降誕劇に取り組みますが、よりクリスマスのことを知り神様の愛に感謝できるよう、クリスチャンの先生方から様々な話を聞く機会を作っています。年少時代からお祝いしてきたクリスマス。年長になるとクリスマスに関することへの興味・関心も広がっていく姿が見られます。あるクリスチャンの先生が話をされた後に、子ども達の降誕劇の話に触れ「神様はいつも守って下さっているから、ドキドキしても大丈夫だよ。」という言葉を下さいました。子ども達は降誕劇を作り上げる為、様々な気持ちを持ちながら取り組んでいました。ある子どもの保護者から、クリスチャンの先生からの言葉を聞いて、神様が守ってくれるから大丈夫！と降誕劇に取り組みだしたと話を聞くことが出来ました。神様の愛を感じ、感謝と喜びを持ってクリスマスを迎えることが出来ました。今年も子ども達にとって、神様からの愛をどんな形で感じ、クリスマスをお祝いするのか見ていきたいと思います。



乳児クラスのアドベント礼拝

早緑子供の園宗教委員 藤丸 章子

毎年、クリスマスの4週間になると、乳児クラス(0・1・2歳児)でもアドベント礼拝が始まります。「♪メリークリスマス」を歌いながら、保育士がアドベントカレンダーの前に椅子を並べ始めると、子どもたちも次々に自分で椅子を運んで来て座り始めます。

「♪おほしがひかる」や「♪やどやさんのうた」

は、子どもたちが大好きな歌です。

アドベントカレンダーの窓からは、クリスマスに関連したものだけでなく、子どもたち一人ひとりのシンボルマークも出てきます。そこには、みんなで祝うクリスマスという意味も込められています。「今日は誰のマークかな？」と子どもたちも、とても楽しみにしています。

降誕の話は、乳児クラスの子どもたちにも、とても不思議で厳かな静かな夜の出来事だという思いを大切に伝えます。絵本や人形を用いて伝える保育士の話に子どもたちはじっと耳を傾けます。私たちに神さまの子イエスさまを贈って下さった嬉しいクリスマスの日を子どもたちと共に喜びのうちに迎えたいと思います。



1・2歳児のアドベント礼拝

クリスマスは私にとって何だろう？

事務局長 高良 研一

毎年クリスマスの時期となっても、イルミネーションを横目で見ながら、何となく時が過ぎ去っているかもしれません。21世紀の現代に生きる私達にとって、イエスの誕生の意味は何でしょうか？それは、イエスがこの地上の平和を求め、救い主として、虐げられた人々、弱い立場にある人々や、いろいろな悲しみや苦しみの中にある人々に寄り添い、救いをもたらすためということができるでしょう。自分自身や家族の病気、そして介護の問題を抱え、種々のストレスを感じ苦悶し悩んでいる方々がいます。この時期に東日本大震災や原発事故、そして熊本の震災や九州北部豪雨により多くの苦しみを抱えている方々や、戦争やテロ、自然災害等により愛する家族を失い嘆きと深い悲しみの中におられる方々のことも覚えながら、西南学院で働くことのできる幸いを神に感謝し、建学の精神に立ち温かい心をもって、互いに神の愛を分かち合う機会とすることができたらと思います。